

慧思における末法と『法華経』

采 罽 晃

一

慧思（五一五―五七七）は、末法思想の最初期の提唱者⁽¹⁾として、また、『法華経』至上主義を初めて標榜した人物として知られる。

末法思想は、終末思想の一種として捉えられることもあるが、慧思にとつては、必ずしもいわゆる「世界の終わり」のごときものを意味してはいなかった。例えば劫尽・劫滅の如き発想を慧思の思想中に見出すことは難しい。天災等を描くことはあっても、あくまで『法華経』等に描かれているものを表現上なぞつたに過ぎない。慧思の関心の中心にあつたのは、あくまでも仏法が減ぶことであり、とりもなおさず、自らの仏法が減ぶことであつた。

ところが、慧思の伝記や著作を読む限り、「末法」と「法華」とをストレートかつ論理的に繋がた記述は見当たらない。しかしながら、慧思という人物を特徴づける「法華」と「末法」という二つの要素間に思想的必然性がないというのも不自然である。本稿では、両者の連続性を探ってみたい。

真撰と考えられる慧思の著作の中でも、『隨自意三昧』『諸法無諍三昧法門』『法華経安樂行義』の三つは慧思の実践観を示すものとしてとりわけ注目される。

このうち、『法華經安樂行義』は、その中において『諸法無諍三昧法門』と『隨自意三昧』とを予想しているので、これをもつとも後の著作であろうと考えられる。その成立は、『統高僧伝』に大蘇山の慧思を訪ねてきた智顛に対して「為に四安樂を説けり」と記されていることから、この時点ではすでにその思想が完成していたと考えられる。したがって、『法華經安樂行義』は、慧思が大蘇山にいた四十一歳から五十三歳までの間に執筆されたものと考えられる。なお、『諸法無諍三昧法門』と『隨自意三昧』については、『隨自意三昧』の方が先に成立したであろうと考えられている⁽³⁾。この意味では、『法華經安樂行義』が慧思の主著であるといっても差し支えなからう。以下、『法華經安樂行義』を中心に見ていくことにしたい。

二

そもそも、慧思にとって『妙法蓮華經』はどのような意味を持っていたのであろうか。既に先学によって明らかにされているように、慧思教学の根幹をなしていたのは、『般若經』やその解説書である『大智度論』によって明らかにされた般若思想であつた⁽⁴⁾。

その一方で、慧思は、『隨自意三昧』には「凡そ一切の新発心の菩薩、……先ず当に念仏三昧・般舟三昧を具足し及び妙法華三昧を学ぶべし」とあり⁽⁵⁾、『諸法無諍三昧法門』には『妙法華』会は但一乘頓中の極頓たる諸仏の智慧を説く⁽⁶⁾と言ひ、また『法華經安樂行義』の冒頭で

『法華經』は大乗の頓覺の、無師自悟して疾く仏道を成ずる、一切世間難信の法門なり。凡そ是れ一切の新学の菩薩、大乘を求め一切の諸菩薩に超過して疾く仏道を成ぜんと欲さば、須く持戒忍辱精進して禪定を勤修し、専心に法華三昧を勤学すべし⁽⁷⁾。

と述べるなど、『法華經』を最前面に掲げている。『般若經』と『法華經』がどのように連絡するかについては、『大

『智度論』が両者を繋ぐ紐帯となつてゐることが、既に明らかにされてゐる。⁽⁸⁾

では、なぜ『法華經』でなくてはならなかつたのか。確かに、『法華經』は慧思が十五歳で出家した時から慣れ親しんだ經典であり、『法華經安樂行義』においても「普賢勸発品」の読誦行が有相行として述べられてはゐる。『法華經』の読誦行は、『法華經安樂行義』中でも有相行の中心として位置づけられてゐるものであり、また慧思自身が出家後間もなくから慣れ親しんできた行法であり、⁽⁹⁾智顛もこの行を授けられたのであつたから、慧思の実踐行の中では軽からぬ地位を占めていたことは確かである。しかしながら、『法華經安樂行義』の力点は、有相行ではなく、あくまで無相行に置かれてゐる。また、教学の中心である『般若經』から『法華經』へと架橋したとされる『大智度論』にしても、そこでの『法華經』の位置づけは慧思の実踐課題とストレートに通じるようには見えない。『大智度論』は、確かに『法華經』に關説することが少なくないが、その関心の中心はあくまで阿羅漢成仏乃至授記であつて、慧思が課題としたような、末法という障害の回避を目論むことには重きが置かれてゐるとは言えないからである。

三

慧思の他の著作と同様、『法華經安樂行義』も、必ずしも論理を積み重ねるような形式で進められてゐるわけではない。ことに『法華經安樂行義』は經典の文章に従つて解釈する形式を採つており、慧思の主張がストレートに述べられてゐるわけではない。従つて、本論では、『法華經安樂行義』中に散在する特徴的な記述に着目していくことによつて、慧思が見定めていたものを浮かび上がらせるように試みてみたい。

少々乱暴ではあるが、『法華經安樂行義』は、前後二つの部分によつて構成されてゐると考えることができるであらう。

まず、前半では、『法華經』こそが「大乘頓覺無師自悟疾成仏道」の法門であるとし、經題釈を通じて衆生が妙で

あることを説いている。この前半部分では、『法華経』を賞賛しながらも、『法華経』の経文や教説に閑説することができる。ほとんど無い。従って、この前半部分から、慧思が『法華経』に着目せざるを得なかった思想的必然性を見出すことは難しい。

後半にいたって、経文の随文解釈に入り、安樂行について説かれる。まず、四種類の安樂行をそれぞれ紹介する。慧思はそれぞれの安樂行に名を付けているが、第二以降についてはさらに別称とも言うべきものを示している。いま整理して示せば次の通りである。

- ① 正慧離著安樂行
- ② 無輕讚毀安樂行・転諸声聞令得仏智安樂行
- ③ 無惱平等安樂行・敬善知識安樂行
- ④ 慈悲接引安樂行・夢中具足成就神通智慧仏道涅槃安樂行⁽¹²⁾

『法華経』「安樂行品」に説かれる四種類の安樂行は、慧思以前にもさまざまに名づけられてきた。竺道生『法華経疏』においては、①住行、②親近処行、③心無嫉妬、④大慈心と名づけられている⁽¹³⁾。また、智顛『法華文句』では、①身業、②口業、③意業、③誓願の名を挙げるとともに、次のような先行する諸師の説を紹介している⁽¹⁴⁾。

旧 ① 仮実二空為体、② 説法為体、③ 離過為体、④ 慈悲為体

基師 ① 空、② 離憍慢、③ 除嫉妬、④ 大慈悲

龍師 ① 身遠諸惡漸近空理、② 除口過、③ 除意嫉、④ 起慈悲

これら先行する諸師や直弟子智顛によるものに比べて、慧思が示す名称は、かなり具体的な実践を想起させるものになっている。なお、『法華経安樂行義』では四安樂行を列挙した後、行には有相行と無相行とがあると述べ、無相行こそが安樂行であるとする⁽¹⁵⁾。有相行とは、「普賢勸発品」に基づくもので、北地において古くから行じられていた

読誦行を指すものと考えられているが、かなり簡単な説明しか与えられていない。次に「無相行」とは、「安樂行品」に基づく四安樂行を指すのであるが、ここには慧思独自の解釈が見られ、著作の題ともされているように、かなり重視されている。諸伝に伝えられる慧思の著作の題目を見ても『法華經』に直接的に関係がありそうなのはこの『法華經安樂行義』だけであるから、この四安樂行だけは特に別出せねばならぬほどに、慧思にとって最高の經典であつた『法華經』の中でもさらに重要なものであつたと推測される。

そもそも『法華經』の四安樂行は、文殊菩薩の「菩薩摩訶薩、後の惡世に於いて、云何が能く是の經を説かん」という質問に応えて仏が説いたものである。従つて、『法華經』に説かれている四安樂行は、三昧というよりはむしろ『法華經』を説き広める際の行動規範とも言うべきものであつて、どちらかといえば戒律のような色彩をもっている。また、經を説くためには、当然のことながら、經を聞く（相手）が必要なのであり、誰もいない山の中で一人こつそりで行じることができない。つまり、四安樂行を行じるためには、必然的に經を聞く相手としての衆生を視野に入れなければならず、社会的な実践とならざるをえない。この点が、その気になれば一人でも行じることが可能な三昧や読誦行とは決定的に異なる部分であると言えよう。

慧思は『法華經』における四安樂行の性格を受け継ぎつつも、禪觀として安樂行を組織しようとする。安樂行の別名である無相行を釈して次のように述べている。

一切諸法中に心相寂滅して畢竟じて不生なり。故に名づけて無相行と為すなり。常に一切深妙の禪定に在りて、行住坐臥飲食語言、一切の威儀に心常に定まれるが故に。諸余の禪定、……は、是れ阿毘曇雜心の聖行なり。安樂行中の深妙の禪定は即ち此くの如くならず。⁽¹⁸⁾

ここでは、安樂行は明らかに一つの禪定として捉えられている。これは禪定至上主義を採る慧思としては当然の発想であつたろうが、極めて独自の見方であると言ふことができよう。また、ここにおいても、欲界地から非有想非無想

処地へと次第して深化する禪定を「阿毘曇雜心の聖行」としてしりぞけ、安樂行はそのようなものではないとして、次第によらない頓覺の禪定であることを述べている。前述のように、『法華經安樂行義』の冒頭ではほとんど何の説明も与えられないままに「『法華經』は大乗の頓覺」との宣言がなされていた。ここに至つて改めて同様の主張がなされていることには注目しておいてよい。

しかし、この後、安樂行については、身安樂行に相当する正慧離著安樂行を衆生忍（生忍）・法忍（法性忍）・大忍（法界海神通忍・神通忍）の三忍という観点から述べるだけ¹⁹で、あとの三つの安樂行については、項目を挙げては何らの説明も加えられていない。もつとも、その内容を見れば、明確に表明こそしていないものの、他の三安樂行は正慧離著安樂行に摂せられるものとして位置づけられていることが窺える。「正慧もて著を離る」とは般若空觀に基づくことを表現したものに他ならない。恐らくは、正慧離著安樂行を根底としつつ、実践の中での展開が他の三安樂行として想定されているのであろう。ここにも慧思の禪定主義を垣間見ることができるといえる。

さて、その三忍についても、慧思が項目名を挙げて詳細に説明するのは最初の衆生忍に大部分が費やされる。しかしながら、この点についても、その内容と項目名とを比べ見れば、衆生忍を説明する中に、法忍と大忍とを収めていることが窺われる。

もつとも、一段においては、慧思は大忍のみに特別な地位を与えている。

前二種の忍（衆生忍と法忍とを指す〔筆者注〕）は「無明煩惱を破する忍」と名づく。亦「聖行の忍」と名づく。聖人の行処なるが故に「聖行」と名づく。……大忍とは、五通及び第六通を具足し、四如意足を具足し、十方の諸仏及び諸天王に対し、面對共語し、一念に能く一切の凡聖を覚らしむが故に大忍と名づく。諸神通に於いて心不動にして、聖道具足すれば、名づけて聖忍と為す²⁰。

ここでは、三忍の内、衆生忍と法忍とは、「聖行の忍」として位置づけられており、先に見た「諸余の禪定」の如く、

漸悟に過ぎないとされている。これに対して、大忍は、「一念に」覚らせるものであるとして、唯一頓覺に位置づけられている。

云何が名づけて「忍辱地に住す」と為す。略説するに三種の忍有り。一には衆生忍、二には法忍、三には大忍、亦た神通忍と名づくるなり。衆生忍には三種の意有り。……第三の意は、剛強の悪衆生の処に於いて調伏して改心せ令めんが為の故に、或いは麁言を与えて毀咎し罵辱して、彼をして慚愧し善心を発心すことを得せ令むるを、衆生忍と名づく。⁽²¹⁾

また、「打罵に瞋らず慈悲軟語もて」対処するのが忍辱ではないのかという問いに対して、「打罵に報いざるは、此れは是れ世俗戒中の外威儀忍なり⁽²²⁾」として、悪人の行為に対して無為に堪え忍ぶことを批判している。さらに、「涅槃經」から仙予国王と有徳国王との話を示し、悪人を摧伏することこそが菩薩の為すべきことであつて「此れ菩薩の大方便忍にして、小菩薩の能く為す所に非ず⁽²³⁾」と、これこそが菩薩の行すべき真の忍辱であるという。

慧思にとつては、悪業を為す者を前にしたとき、その悪業を堪え忍ぶよりも、よしんばその者が命を落とすこととなつたとしても、懲罰を加えて改心の機会を与えることの方が時機に合致していると考えられたのである。逆に言えば、そうでもして仏法を〈緊急避難〉させなければ、法滅を避けることはできないと慧思は考えていたのである。このような積極的な態度は、「柔和善順⁽²⁴⁾」という經文の語を釈する中にも見ることができる。

「柔和善順」とは、一には自ら其の心を柔伏し、二には衆生を柔伏するなり。……「善順」とは、衆生の根性を善く知りて、随順して是れを調伏するなり。……「柔和」とは名づけて法忍と為す。「善順」とは名づけて大忍と為す。⁽²⁵⁾

行者自身が「柔和善順」たるべきことを示すのみならず、衆生に対して「柔伏」「調伏」することをも意味するという。では、「法忍」「大忍」とはどのようなものかと言うのであろうか。先ず法忍とは、三種の意があり、第一には

一切法は皆な空寂なりと観じて一切法に心が動かなようにすることである。第二の意は、第一の意を衆生に教えて大乘に住せしめることである。第三の意は、様々な方便（神通を現じるなど）をもつて衆生を調伏することである、と言う。次に大忍とは、別名神通忍ともいい、一切の無量の衆生を「一時に」度することであり、これこそが菩薩が行すべき真の「忍辱」であると位置づけられる。⁽²⁶⁾このような解釈を見ると、慧思にとつて「柔和善順」とは、「一には自ら其の心を柔伏し」とは言うものの、慧思自身が「柔和善順」であることよりも、衆生を「柔和善順」ならしめるといったニュアンスの方に力点が置かれているということが明らかであり、かなり積極的な解釈がなされている。

さて、以上のように、『安樂行義』を見ると、要所要所に「神通」が語られていることに気付かされる。更には、その神通が語られるところでは、必ず「一念に」「一時に」覚りに至る（或いは、覚りに至らしめる）ことが述べられている。「安樂行品」そのものを読む限りでは行動規範・律儀といった意味以上のものを見出しがたい安樂行を、慧思は禅定として位置づけなおした。その目的は、『安樂行義』冒頭に述べられているがごとく、「大乘の頓覺」を完成し、「無師自悟して疾く仏道を成ずる」ためであった。

四

『法華經安樂行義』では、薬王菩薩や妙莊嚴王菩薩に対して、その名を挙げて共感を示している。しかるに、その内容は、神通力への関心であった。では、なぜ神通力なのか。

慧思は神通に着目するが、それにはいくつかの理由があった。一つには、自らが長寿仙となつて五十六億七千万年後の弥勒仏の世にまで『般若經』や『法華經』を護持しようとするものであった。⁽²⁷⁾しかしながら、先に確認したように、少なくとも『法華經安樂行義』においてはそういった側面よりも、「一念に」「一時に」乃至「一生に」仏道を成

就する（せしめる）こと、即ち「頓覺」「頓悟」の背景として「神通」が位置づけられていることが明らかとなった。仏教のなかでも特に神通に着目していくという傾向は、道教が力をつけつつあって仏教とも相互に影響し合っていた当時としては、必ずしも奇異なものではない。⁽²⁸⁾時代の雰囲気のみならず、頓覺への志向は、慧思が『法華經』について語る時の現世における衆生濟度の不可能性という問題が、修行方法や概念操作という技術的なことでは解決できるものでないことは明白だったからである。これを突破するには、神通力という超自然的な力を身につけなくてはならないと考えたのであろう。

そこで問題となるのは、いかにして神通を身につけるかである。そこでモデルケースとして着目したのが、『法華經』に説かれる薬王菩薩や妙莊嚴王の物語である。慧思は、これらの物語を、『法華經』によって仏道を求め、「一生」のうちに「仏の神通」を獲得する物語と要約する。

勇猛精進して仏道を求むとは、薬王菩薩の難行苦行の如し。……『法華經』を聞きて精進して仏を求め、一生の中に於て仏の神通を得。亦、過去の妙莊嚴王の如し。……『法華經』を誦し、専ら仏道を求め、八万四千歳を過ぎて、一生に諸仏の神通を具足し、受記作仏す。⁽²⁹⁾

ここにおいて、「末法」と『法華經』とが接続するのであり、また、慧思が『法華經』に注目した理由の一つもここにあったのではないかと考えられる。

註
略号

卍——『新纂卍大日本統藏經』

大——『大正新脩大藏經』

(一) 結城令聞「支那佛教に於ける末法思想の興起」『東方學報（東京）』第十六冊、pp. 205～215

- (2) 『統高僧伝』卷第十七「智顛伝」(大50.564b)
- (3) 新田雅章「慧思における禅定思想の展開」『印度学仏教学研究』21-2, p. 588、佐藤哲英『統天台大師の研究』p. 160
- (4) 例えば、安藤俊雄「慧思の法華思想―智度論との関係を中心として―」『山口博士還暦記念印度学仏教学論叢』(法蔵館)では、「法華経について立誓願文に言及してゐるのは僅か一二箇処にすぎず、全篇はただ般若経に対する烈々たる敬慕の熱情によつて盛られてゐる。」(p. 235)と述べる。
- (5) 『隨自意三昧』(大55.496a~b)
- (6) 『諸法無諍三昧法門』卷下(大46.635b)
- (7) 『法華経安樂行義』(大46.697c)
- (8) 安藤俊雄「慧思の法華思想―智度論との関係を中心として―」『山口博士還暦記念印度学仏教学論叢』法蔵館1955, pp. 233~244
- (9) 『統高僧伝』「慧思伝」は、慧思出家後の様子を伝える中に「『法華』等の経、三十余巻を誦すること、数年の間に千遍便ち満じ」(大50.562c)と、わずかな間に千回も『法華経』などの經典を誦したと述べている。また、慧思自身も『立誓願文』中の自著年譜に相当する箇所で「年十五に至り、出家し修道して『法華経』及び諸大乘を誦して精進苦行せり」(大5.782a)と述べている。また後の成立になる『隋天台智者大師別伝』においても、慧思を「十年常誦、七載方等、九旬常坐、一時円証」(大50.191c)と紹介している。禅觀を重視した慧思の教学においても誦誦行が決して軽からぬ位置を占めていたのであり、そのことは慧思没後においてもよく知られていたことが窺える。
- (10) 『法華経安樂行義』(大46.697c~700a)
- (11) 『法華経安樂行義』(大46.700a~702c)
- (12) 『法華経安樂行義』(大46.700a)
- (13) 竺道生『妙法蓮華経疏』卷下(大27.13b~c)
- なお、吉蔵『法華義疏』卷第十(大34.594a)では、「今、竺道生及び『注法華』に依らば」として、①空寂行、②無憍慢行、③離嫉妬行、④慈悲行と名付けているが、現在伝わっている竺道生の説とは少しく異なっているようである。或いは、吉蔵が言う『注法華』とは、竺道生の『妙法蓮華経疏』ではなく、劉虬の著述を指すか。『大唐内典録』卷第四(大35.263a)に

劉虬の著作として『注法華』十卷を挙げているのを参照。

- (14) 智顛『妙法蓮華經文句』卷第八下(大34, 119a)。なお、ここでは慧思の説は、①無著正慧、②口不說過、③敬上接下、④大慈悲と紹介されるのみで、慧思が『安樂行義』の中でつぶさに挙げている別称については全く触れられていない。

- (15) 『法華經安樂行義』(大46, 700a)
無相行者、是安樂行。

- (16) 佐藤哲英『続天台大師の研究』pp. 288～289

- (17) 『妙法蓮華經』卷第五「安樂行品」(大9, 37b)

- (18) 『法華經安樂行義』(大46, 700a)

- (19) 『法華經安樂行義』(大46, 700b)に「三忍とは、即ち是れ正慧離著安樂行なり」と総括する。

- (20) 『法華經安樂行義』(大46, 700b)

- (21) 『法華經安樂行義』(大46, 701b)

- (22) 『法華經安樂行義』(大46, 701c)

- (23) 『法華經安樂行義』(大46, 701c)

- (24) 『妙法蓮華經』卷第五「安樂行品」(大9, 37a)

云何名菩薩摩訶薩行処。若菩薩摩訶薩。住忍辱地柔和善順而不卒暴心亦不驚。

- (25) 『法華經安樂行義』(大46, 702b)

- (26) 『法華經安樂行義』(大46, 702a～b)

- (27) 従来の慧思研究は、この側面に着目したものが多かった。また、著作という観点から見れば、このような側面は『立誓願文』に極めて顕著である。

- (28) 拙論「慧思の禅思想の背景」『印度学仏教学研究』46-1

- (29) 『法華經安樂行義』(大46, 698a)